

はるす

発行日 2005年3月30日 第18号
 発行 札幌歯科医師会立口腔医療センター
 〒064-0807札幌市中央区南7条西10丁目
 TEL (011)512-9497 FAX (011)511-2272
<http://www.dnet.or.jp/center/>
 E-mail omc-s@dnet.or.jp
 発行人 菊田浩一 発行責任者 鶴岡一彦

障がい者歯科医療の現状とこれから ...その2 これから



札幌歯科医師会口腔医療センター総務部長 戸倉 聡

札幌歯科医師会に「障害者歯科診療ネットワーク」があることはご存じでしょうか？ 障がいを持った方がその生活する地域で自由に医療機関を選択できるよう、また診療に際して全身管理が必要な患者さんを紹介・依頼するための連携強化を目的に平成10年に立ち上がりました。現在では札幌歯科医師会会員300余名と病院歯科・大学病院などの公的医療機関で構成され、口腔医療センターが中心となりその運営を行っています。ところが実際には、このネットワークはあまり活用されているとはいえません。なぜでしょうか？ 理由はいくつか考えられます。1番目の理由としてはネットワークの存在そのものが市民に知られていないこと、2番目にネットワークが利用しにくいということが挙げられます。現在のネットワークでは、利用希望者はセンターに電話連絡にて希望事項を伝え、紹介されるのを待つという手数が必要です。そこで、もっと利用者の使い勝手を優先した形態に変更する準備を進めているところです。センター開設当初は札幌市の障がい者歯科診療を一手に担うという意気込みでスタートしましたが、今後は診療に留まらず、医療圏の中心で一次医療と三次医療を有機的に繋ぐ役割を担うべきと考えます。


歯科医師にとって大学で受けた講義だけでは安全・快適な障がい者歯科診療は提供できません。適切な場での研修が必要なのです。既に当センター摂食・嚥下リハビリテーション（食べたり飲んだりすることに障がいを持つ方への指導・訓練）外来では平成12年度より独自の研修制度を立ち上げております。また平成15年度より、日本障害者歯科学会の認定医制度がスタートしました。この学会認定医の資格を得るために必要な臨床経験施設に当センターが指定されました。今後はセンターで研修した学会認定医も地域で障がい者歯科診療に貢献できるようになるでしょう。こうしてセンターで研修・診療を経験した歯科医師を含めた一次医療と大学病院等の三次医療を、口腔医療センターが二次医療機関として連携する障がい者歯科ネットワークの再構築を準備しています。

小泉内閣の進める行財政改革は何より先に医療費削減に手をつけました。2002年10月からの70歳以上の高齢者一部負担金1割、一昨年4月からの社会保険本人一部負担金3割への変更により、国の負担分を削減したのです。このことにより国民の医療機関受診が激減しています。国民が健康になったからではありません。この改革の余波が今度は、障がいを持った方達の医療に及ぼうとしています。

具体的には、昨年10月より北海道および札幌市が行う医療費助成事業の一部変更により、障がいを持った患者さんが窓口で支払う一部負担金が基本的に増額となりました。医療機関を受診する機会が多くなる障がいを持った方々の、健康に不安なく生活できるという権利が損なわれかねません。また、障がいを持った方が受診する機会が多い地域の口腔保健センターや大学病院は、どこも必ず国や行政からの補助金により運営が成り立っていますが、国からの北海道および札幌市に対する地方交付税削減の結果、補助金を削減せざるを得ないという事態となりました。現に、札幌歯科医師会口腔医療センターも北海道および札幌市からの補助金を受けていますが、札幌市からの補助金が平成17年度から削減されることが決まりました。

このような厳しい風が吹く中、私たちはセンターでの安心・安全な障がい者歯科診療に加えて、札幌市全域での障がい者歯科診療の充実・ネットワークの確立を責務と考えています。これからも皆さんに愛されるセンターであり続けるよう努力してまいりますので、どうかご理解・ご支援をお願いします。




 待合室にある村中さん
 からの君子蘭が
 満開になりました



季節の色

瀧上 敦子さん

この街に冬の風が吹いた時
 それは 雪を降らし街を白く彩る
 雪が溶けだした頃
 春の足音が聞こえて 新しい芽吹が頭をだす
 それは 白から桃色に代わる
 そして 夏が来て木々の葉は 若々しい緑色に・・・
 そして 涼しい風が吹き始めた頃
 夏と秋風が 一緒に吹いて遊んで
 緑色は秋色に染まる
 秋は 優しい風を吹き
 「冬が準備している」っと そっと教えてくれる
 この街で・・・



「総合的な学習」に伴う職業体験学習に協力して

歯科衛生士長 藤原 咲子

12月2日（木）上記学習の「他人との関わりを通して自分、仲間、社会を知ろう」というテーマのもと、札幌市立啓明中学校より男子1名、女子2名。計3名の3年生が来所見学をしました。

当日の午前中、第1診療室は北海道大学 口腔診断学 内科学教室の杉浦先生、第2診療室では同大学高齢者歯科の小林先生の診療を見学してもらい、診療の合間をみて、両先生に障がい者診療に関してのお話をして頂きました。生徒達は「障がいをもった人達の診療には特にコミュニケーションが大切」と教えてくださった先生の言葉が印象的だったようです。

昼食はそれぞれのお母さんの愛情がたっぷり詰まったお弁当をスタッフと一緒に、少々緊張気味に食べていました。食後の歯磨きには今、センターに来所している患者さんに人気のあるT型歯ブラシを使ってもらいました。

午後からは、ロビンソンプラシと研磨剤を使って10円硬貨の研磨と、それぞれ自分の指の印象を採り石膏模型を作る実習をしました。どちらの作業にも目を輝かせ、熱心に取り組んでいました。指の模型は「おみやげ」として持ち帰ってもらいました。



後日丁寧なお礼状と感想（下記に概要紹介）が送られてきました。普段障がいを持った人と接する機会があまりない若者達が、診療の状況を見学してどの様に感じたのか、スタッフ一同少し心配でもありましたが、感想文を読んでホッとしました。

職業体験学習

「口腔医療センターに行って」 清野 沙織

先日は、とてもお忙しい中、私たちを受け入れて下さり、本当にありがとうございました。

たくさんの患者さんの歯の治療に立ち会わせていただいた中で、私たちが、ある患者さんの力になれた・・・ということに感動しました。ただ、そこにいさせていただけでしたが、その方は私たちを見て、娘さんの事を思い出されたそうでした。

何もしなくても、ある人の力になれたり、支えになれるのなら、進んで人のためになりたいと、思いました。

「貴重な時間」 三浦 万季

普段一緒にいることがほとんどない、体に障害がある人々とたくさんの時間、一緒にいたり、少しでも会話ができ、とても嬉しく、見方や考え方が変わりました。また、医療センターのみなさんが、とても親切にしてくださり、たくさんの話を聞かせていただき、多くの事を学ばせていただきました。

患者さんと話していたり、対応しているみなさんが、とてもすごいと思い、あこがれになりました。

「大好きなおもちゃが壊れてがっかり・・・」

こんな経験をお持ちの方は多いのではないのでしょうか？
センターの待合室にある「たのしい童謡カラオケ絵本」は大人気の絵本ですが、肝心のカラオケが壊れてしまい、数多くの患者さんをごっかりさせていました。そんな折り患者さんの平田 孝さんのお父さんが、ボランティアでおもちゃを直してくださると聞き早速お願いしましたところ、快く引き受けてくださいました。おかげさまで、今またカラオケを楽しんでいる患者さんの姿が見られるようになりました。

今回、平田さんのお父さんのご協力で「おもちゃQキュー病院」のご紹介を代表の大塚 貞雄さんをお願いすることができました。



おもちゃQキュー病院は平成元年4月厚別区の誕生を機に地域の皆さんに親しまれ、利用しやすい「おもちゃ病院」になることを希い白石区民センターのおもちゃ病院から分離独立したボランティア団体です。

現在メンバーは旧国鉄やNTTなど様々な分野の退職者や主婦など15名で毎週1回厚別区民センターでQキュー病院を開き、子供達が持参した動かない車や足の折れた人形やロボット、音の出ない音響製品などの修理に取り組んでいます。

開院以来16年で4,500個の壊れたおもちゃが来院し、その94%以上が完治し生き返ったおもちゃで、子供達を始めお父さん、お母さんにも大変喜ばれています。

私達はおもちゃの修理活動を通して子供達に「物を大切に作るやさしい豊かな心」や「科学や創造性の意欲」が育むことを目標に活動を続けて来ています。

おもちゃは子供達に夢を与えてくれる大切な友達です。



大事なおもちゃが突然動かなくなったり、音が出なかったり、故障で困ったときはQキュー病院に持参してください。
皆さんの来院を待っています。
原則として修理費は無料です。

おもちゃQキュー病院

日時：毎週水曜日（日・祝・祭は休み）

午前10時～午後3時30分

場所：厚別区民センター 2F 和室C

札幌市厚別区厚別中央1条5丁目

電話：（011）894-1581

代表 大塚 貞雄

「独り言」

障がい者診療担当医 小島 寛

歯科というのは、どう考えても人から好かれるものではありません。歯科と聞いただけで逃げ出したくなる人もいて、そういうときには対応に苦慮します。まして、知的な問題を抱える子どもが相手なら、……。それを、抑制具に縛りつけることなくフツーに歯を削ることを＜最終目標＞に据えながら歯科診療に取り組んでいる人がいたとしたら、それは世間の常識を逸脱する行為です。正気を失っているのかもしれませんが。実際に、そういう意味のことを言った児童精神科の先生もいました。

ところが、それに大真面目に取り組んでいる人たちがいます。それが、札幌歯科医師会口腔医療センター障害者診療部のスタッフです。一方では、それに期待を寄せ、応援する人たちもいます。これを読んでいる人たちのことです。

知的障がいをもつ子どもたちに対しては、いろいろな人がいろいろなかたちで支援をしています。そういう世の中になってきたのはよいことですが、日常の取り組みにおいてはいろいろな困難を感じている人も多いのではないかと思います。なかでも、子どもが嫌がることを無理強いするために壁にぶつかるという点では、おそらく、歯科医療関係者の右に出る者はいないでしょう。当センターの歯科衛生士さんたちは、その経験が全国的にみても豊富だと私は思っています。だからといって、この人たちが子どもの敵だと言っているわけではありません。子どもから嫌われることに根気よく取り組み、最後には信頼関係まで獲得するという至難の業に立ち向かった経験が豊富だと言いたいのです。

私は、このようなスタッフに囲まれ、当センターのお手伝いをして6年になります。これまでは多くの人たちとの出会いがありましたが、どのケースもたいていは歯の治療が嫌いです。そこで、歯科診療を受け入れてくれるようになるまでの一連の手順をオーダーメイドで組み立てる必要があります。それを、私はシナリオ（脚本）と呼んでいます。ドラマに喩えるなら、5回くらいでハッピーエンドを迎えるケースもあれば、かなりの長編番組を覚悟しなければならないこともあります。水戸黄門のように超長寿番組になっては困りますが、それはさておき、シナリオと呼ぶからには私の頭の中にはストーリーの概要があります。



ところで、このドラマの登場人物は子どもと歯科医師だけではありません。その周囲には、多くの登場人物がいることも忘れてはいけません。いろいろなタイプの登場人物が主役の子どもに絡みながら、ドラマは展開していきます。

こういふと、そんな複雑なシナリオが描けるわけがないそれに、私の描いたシナリオどおりに現実のドラマが展開するかどうか、わかったものではありません。ただ、私の弟子にあたる先生が、つい最近私に言いました。

「小島先生、この頃、どんな要因が関与して子どもが泣くのか、どうすればその子が泣き止むのか、それにはどれくらいの時間がかかるのかが、私には見えてきたような気がします。うまく言葉では説明できませんが、何となくそういう気がするし、それが当たるようになってきたんです。」

「そうか、腕を上げたな。」（なんだ、今までわからなかったのかい？・・・独り言）

小島先生と馬場翔平くん





平成16年度摂食・嚥下リハの総まとめ

口腔医療センター第2回所員・担当医研修会と

第5回摂食・嚥下リハビリテーション症例発表会3月5日(土)に開催される



今年度第2回目の所員・担当医研修会が札幌歯科医師会館5階大講堂で午後2時より昭和大学歯学部口腔衛生学教室講師 弘中祥司先生をお招きして開催しました。

先生は現在、摂食・嚥下リハ研究の最先端を走る同教室で講師をなさっております。

今回は「摂食・嚥下リハビリテーションの未来」というタイトルで最新の摂食・嚥下リハの研究、これからの方向性についてご講演いただきました。

先生は以前当センターの摂食・嚥下リハで指導にあたられていたこともあり、センターでも応用できるように高度な内容を大変分かりやすく説明してくださいました。



続いて午後3時30分より摂食・嚥下リハビリテーション症例発表会が開催されました。

通算第5回目となる今回は当センターから6つの演題。旭川の道北口腔保健センターから2つの演題発表がありました。活発な質問、討論が続き閉会は6時をまわっていました。

研修会から4時間を越える長丁場にもかかわらず一般会員を含む81名の参加があり、摂食・嚥下リハに対する関心の高さを感じました。(企画研修部長 中澤 潤)

16年度口腔医療センターに視察にいらした方々

9月21日(火) 北海道大学大学院 歯学研究科口腔病態学講座
北川 善政 教授

10月9日(土) 仙台歯科医師会 在宅訪問・障害者・休日夜間歯科診療所
(通称 仙台歯科福祉プラザ)
伊藤 勢津子 医長

11月3日(水・祝) 茅ヶ崎歯科医師会 役員6名



編集後記

今年の雪は記録的でした。雪捨て場の雪の山に穴をあけてドアと窓を付けたら住めそうです。

もう雪たくさん！でももう少しの辛抱です。

(企画研修部長 中澤 潤)

